スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2017年 150 号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 150 September 2017

研究の最前線

◆　2017 年度夏期国際シンポジウム　◆
《中国とロシア・北東アジアの断層線：百年にわたる競争的協力》開催される

2017 年 7 月 13 日（木）･14 日（金）の 2 日間にわたり、スラブ・ユーラシア研究センターで夏期国際シンポジウムが開催されました。今回のシンポジウムの課題は、グローバル・レベルでも北東アジア地域においても益々プレゼンスが高まりつつある中国とロシアの関係を多面的に検討することでした。センター内外からの参加者は、2 日間で延べ 153 名に上りました。本センターは、2016 年度から始まった「人間文化研究機構（NIHU）北東アジア地域研究推進事業」の全国 6 拠点の一角を占めており、今回のシンポジウムは当該事業の一環として位置づけられます。国内の報告者は NIHU 北大拠点および科学研究費「中露関係の新展開：『友好』レジーム形成の総合的研究」（代表：ディヴィッド・ウルフ）のメンバーが中心的役割を果たす一方、海外からの報告者はカナダ、中国、英国、ロシア、モンゴル、インド、メキシコ、ポーランドなど多様な地域から集まりました。

シンポ最後のディスカッション・パネルのようす

内容面では、本シンポジウムの目的と意義を提示するオープニング・セッション（「沖合に中国とロシアを眺めて」）に続き、テーマ別に 5 つのセッションが設けられ、最後に全体を総括するディスカッション・パネル（「中露関係再考」）をおこなうという構成でした。初日の第 1 セッションは「東を向くロシア・西へ進む中国：外交と安全保障政策」と題し、若手のロシア研究者と中国研究者が軍事ファクター、パワーバランス、非対称な依存関係の観点から中露関係の現状に関する報告をおこないました。討論者からは、中露関係の本質がより複雑な依存関係にあるという指摘のほか、地域協力の深化のために何をなすべきかという視点が必要ではないかという問題提起がされました。第 2 セッション「地域大国と北東アジア地域：

歴史と理論の観点から」では、冷戦期全体のインドの立ち位置に影響を与えたネルー政権期の北東アジアとの関係、ロシア革命の経験が中露境界地域での接触を通じて中国の発展に与えた影響、1950 年代の北東アジア諸国の同盟形成の理論化という三つの報告を通じて、過去から現在へのインプリケーションが提示されました。また、第 3 セッション「ロシア極東と中国・ロシア国境地帯」では国家レベルの友好／対立に境界地域の接触がどのように左右されてきたか、あるいはされなかったかが議論されました。ここでは、現在のロシア極東地域開発における先進経済特区の意義、1960-70 年代の中ソ間のイデオロギー・軍事対立が国境地域の接触に及ぼした変化、そしてユダヤ自治州、アムール州の主要輸出品である大豆の生産を事例に、中国との土地取引による相互依存の実態が論じられました。

2 日目の第 4 セッション「競合と補完の狭間：中露関係のトランスナショナル・フロー」では、石油・ガス供給からみた北東アジアにおけるロシアの役割、貿易と直接投資の観点からロシア全体と極東（Pacific Russia）における中国の役割の比較、中国から見た中ロ経済関係の脆弱性、一帯一路の枠内でいかに両国の国益を追求できるか等の論点が検討されました。第 5 セッション「中露関係の遠近法：モンゴル・インド・メキシコから」ではタイトルにある三つの国の研究者がそれぞれの視点で中ロ関係について議論しました。

最後のディスカッション・パネルでは、シンポジウムのタイトルである北東アジアの「断層線」について、中露間にあるのではなく日本海にあるのではないかという問題提起がなされるなど、北東アジア地域の捉え方について率直な議論が交わされました。

本シンポジウムでは、歴史と現在、国家間関係と国境地域の接触、人とモノの移動、当事者の視点、近い地域、遠い地域からの視点など、多様な観点から中露関係を検討し、その動向が北東アジアに及ぼす意義について活発な議論がおこなわれました。また、もう一つの重要な試みが、世代を超えて「歴史」と「現代」を考察するということでした。中露関係研究の第一世代、第二世代、第三世代が一堂に会して議論を交わしたことも、研究史の理解を深め、さらに発展させていく上で大きな意義があったと思います。［加藤］

◆　ボーダースタディーズ・サマースクール開催される　◆

講義のようす

グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」以来の蓄積を誇る UBRJ のサマースクールが 2017 年度も北大サマーインスティチュートの枠組みで開催されました。本スクールは公共政策大学院とスラブ・ユーラシア研究センターのコラボで実施されており、UBRJ のメンバーが中心となって学生の募集や講義などを運営しています。今年は NIHU 北東アジア地域研究事業・北大拠点（NoA-SRC) との共催でもあり、北東アジア地域とボーダーに焦点をあてる講義も多く組み込まれました。

池直美、ディヴィッド・ウルフ、岩下明裕（以上、UBRJ/NoA-SRC)、堀江典生（富山大学 /NoA-SRC)、エドワード・ボイル（九州大学 CAFS)、ヤロスラフ・ヤンチェク（センター客員教授）らに加え、ABS（Association for Borderlands Studies）会長グアダルーペ・コレ

ア - カブレラ（テキサス大学リオグランデバリー校）を始めとし、ウリセス・グラナドス・キロス（メキシコ自治工科大学）、ゾーレン・ウルバンスキー（ケンブリッジ大学）ら国際色豊かな教授陣が講義しました。世界各国から延べ（公共政策大学院とセンターの双方で）30名を越える学生や若手研究者の参加もあり、熱心な議論が続きました。サマースクールにかかわった皆さま全員に心よりお礼申し上げます。［岩下］

◆　共同研究員　◆

2017年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下のとおりです。（五十音順）なお、2016年度から2年間の共同研究員については、センターニュース第145号をご覧ください。［事務係］

共同研究員（一般）

①任期：2017年4月1日～2019年3月31日（2年間）

秋山徹（早稲田大）、阿部賢一（東京大）、飯尾唯紀（城西大）、池田嘉郎（東京大）、諫早勇一（名古屋外国語大）、井澗裕（北海学園大）、井上まどか（清泉女子大）、岩﨑一郎（一橋大）、岩本和久（札幌大）、上垣彰（西南学院大）、海野（山﨑）典子（日本学術振興会特別研究員）、江淵直人（北大低温科学研究所）、大串敦（慶應義塾大）、大塚夏彦（北大北極域研究センター）、大西富士夫（北大北極域研究センター）、大野成樹（旭川大）、岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、加藤有子（名古屋外国語大）、亀山郁夫（名古屋外国語大）、久保慶一（早稲田大）、小松久男（東京外国語大）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（みずほ総合研究所㈱）、左近幸村（新潟大）、佐々木史郎（国立文化財機構東京国立博物館）、佐藤圭史（北海道医療大）、塩川伸明（東京大）、篠原琢（東京外国語大）、志摩園子（昭和女子大）、下里俊行（上越教育大）、下斗米伸夫（法政大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、新免康（中央大）、朱永浩（福島大）、杉浦秀一（北大メディア・コミュニケーション研究院）、杉本良男（国立民族学博物館）、髙尾千津子（東京医科歯科大）、高倉浩樹（東北大）、巽由樹子（東京外国語大）、田畑朋子、地田徹朗（名古屋外国語大）、鶴見太郎（東京大）、徳永昌弘（関西大）、鳥山祐介（千葉大）、中井遼（北九州市立大）、中澤敦夫（富山大）、中田瑞穂（明治学院大）、中地美枝（北星学園大）、中野潤三（鈴鹿大）、中村唯史（京都大）、長與進（早稲田大）、沼野充義（東京大）、根村亮（新潟工科大）、野田仁（東京外国語大）、野中進（埼玉大）、野部公一（専修大）、乗松亨平（東京大）、橋本聡（北大メディア・コミュニケーション研究院）、濱本真実（津田塾大）、林忠行（京都女子大）、平田武（東北大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（北大経済学研究科）、福田宏（成城大）、藤嶋亮（國學院大）、前田弘毅（首都大学東京）、松里公孝（東京大）、松戸清裕（北海学園大）、溝口修平（中京大）、三谷惠子（東京大）、宮崎悠（北海道教育大）、六鹿茂夫（静岡県立大）、望月恒子（北大）、森下嘉之（茨城大）、谷古宇尚（北大文学研究科）、湯浅剛（広島市立大）、横手慎二（慶應義塾大）、吉村貴之（早稲田大）

②任期：2017年4月1日～2018年3月31日（1年間）

高山陽子（亜細亜大）、佐藤嘉寿子（帝京大）、醍醐龍馬（大阪大）、長沼秀幸（日本学術振興会特別研究員）、野坂（佐原）潤子（ビルケント大）、松本かおり（神戸国際大）、ヨフコバ四位エレオノラ（富山大）

共同研究員（地域比較）

任期：2017年4月1日～2019年3月31日（2年間）

小沼孝博（東北学院大）、辛嶋博善（国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点）、高本康子、

佐藤隆広（神戸大）、武田雅哉（北大文学研究科）、平野千果子（武蔵大）、松本ますみ（室蘭工業大）、丸川知雄（東京大）、水谷智（同志社大）、毛里和子（早稲田大）、山根聡（大阪大）

共同研究員（境界研究）

①任期：2017 年 4 月 1 日～ 2019 年 3 月 31 日（2 年間）

安溪貴子（山口大）、池炫周直美（北大公共政策学連携研究部）、石井明（東京大）、北川眞也（三重大）、北村嘉恵（北大教育学研究院）、小池康仁（一般社団法人与那国フォーラム）、今野泰三（中京大）、佐道明広（中京大）、樽本英樹（北大文学研究科）、中居良文（学習院大）、中山大将（京都大）、八谷まち子（九州大）、前田幸男（創価大）、益尾知佐子（九州大）、舛田佳弘（日本文理大）、山﨑幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）、山本順司（北大総合博物館）、吉見宏（北大経済学研究科）、渡邉浩平（北大メディア・コミュニケーション研究院）

②任期：2017 年 4 月 1 日～ 2018 年 3 月 31 日（1 年間）

木山克彦（東海大）

◆ 2017 年度科学研究費プロジェクト ◆

2017 年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです（8 月 8 日現在：「研究成果公開促進費（学術図書）」を除く）。［事務係］

基盤研究（A）

宇山　智彦　比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究（2013-17 年度）

岩下　明裕　ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築（2014-17 年度）

田畑伸一郎　ユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）の発展モデルの比較（2015-18 年度）

家田　　修　被災者参画による原子力災害研究と市民復興モデルの構築：チェルノブイリから福島へ（2015-17 年度）

野町　素己　新コーパスに基づくカシュブ語文法の多階層的研究（2017-21 年度）

基盤研究（B）

David Wolff　中露関係の新展開：「友好」レジーム形成の総合的研究（2015-18 年度）

仙石　　学　ポストネオリベラル期における新興民主主義国の経済政策（2016-19 年度）

挑戦的萌芽研究

家田　　修　東欧世界の成立と日本：日本・東欧関係史の再構築と新たなスラブ・ユーラシア史（2015-17 年度）

野町　素己　セルビアにおけるバナト・ブルガリア語の現状および言語変化に関する研究（2016-18 年度）

越野　　剛　北東ユーラシアにおけるロシアと中国の文化混在の記憶と表象（2016-18 年度）

挑戦的研究

高本　康子　旧日本陸軍遺品資料における「大陸」諸宗教表象の研究（2017-19 年度）

若手研究（A）

高橋美野梨　自治と気候変動：デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」と「対内的自治」（2014-17 年度）

若手研究（B）

高橋沙奈美　国際関係をとおしてみる現代ロシア教会の列聖と聖人崇敬（2016-18 年度）

油本　真理　現代ロシアにおける政治体制と選挙：選挙の公正性をめぐるポリティクス（2016-18 年度）

加藤美保子　クリミア編入以後のロシアのアジア外交：中国中心主義から多角化への移行とその問題（2017-20 年度）

研究活動スタート支援

神竹喜重子　ロシア音楽の「自己覚醒」に対しマスメディアが果たした役割の研究（2016-17 年度）

特別研究員奨励費

植田　　暁　全面的集団化期の中央アジアにおける遊牧・農耕経済の研究（2017-19 年度）

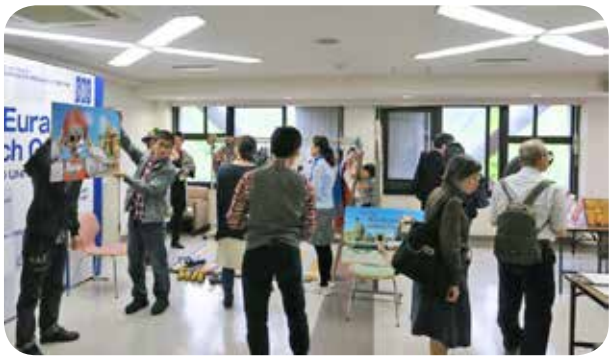
松嵜　英也　自治領なき領域的自治の機能：ソ連解体期のクリミアと沿ドニエストルの比較研究（2017-19 年度）

◆　センター一般公開開催される　◆

今年も北大祭の開催期間に合わせて､6 月 3 日（土）にスラブ・ユーラシア研究センターの一般公開がおこなわれました。不安定な天候で午後からは冷たい雨が降る中でしたが、昨年度よりやや増えた 343 名の来場者がありました。センター 4 階の会場では、「着て、見て、触れて！スラブ・ユーラシアの文化」と題し、センタースタッフによる最新の研究成果に関する展示とサイエンス・トークをおこない、毎年恒例となっている大人から子どもまで楽しめるスラブ・ユーラシア地域の絵本の展示、アニメ上映と茶菓子の提供をおこないました。

大盛況だったサイエンス・トーク

一般公開の柱であるサイエンス・トークは、岩下明裕教授と写真家の斉藤マサヨシ氏による「ボーダーツーリズムの魅力を写真で語る：稚内・サハリンからのメッセージ」、長縄宣博准教授による「ロシア革命と現代世界」という 2 本立てでした。サハリンに何度も通い雄大な自然やそこに暮らす人々、日本領だった時代を忍ばせる遺構などを写真にしてきた斉藤氏による稚内・サハリン旅行の体験談と、日本各地でボーダーツーリズムと地域起こしを連動させている岩下教授の軽妙な掛け合いは、来場者を引き込んでいました。長縄准教授は、1917 年のロシア革命からちょうど百周年の今、革命の動乱を生きた人々の経験に我々が学べることについて語りかけ、来場者との活発な意見交換がおこなわれました。長縄准教授の説明と、ロシア革命前後の貴重な写真を用いて笹谷研究支援推進員がデザインしたパネルは、見やすくわかりやすいと評判でした。



顔出しパネルも好評でした

本年度のもうひとつの目玉企画は、ロシアとウクライナ、ウズベキスタンの民族衣装を着用できるコーナーでした。普段なかなか目に出来ない鮮やかな民族衣装を、実際に手にとって着てみたら面白いだろうという意図での催しでしたが、大勢の来場者が華やかな衣装の色

合いやエキゾチックな刺繍や絹織物に触れて楽しんでいました。スタッフが作った民族衣装の顔出しパネルも好評でした。また、昨年の「ウズベキスタンのお茶会」コーナーを進化させた「チャイハナでひと休み」企画では、中央アジアの陶器や刺繍布で飾られたテーブルで、高橋助教がウクライナから持ち帰ったチョコレート菓子や、ウズベキスタンの乾燥果物やアーモンドをつまみ、お茶を飲めるスペースを提供しました。広い構内を歩き、迷路のような回廊をたどってセンターにたどり着いた来場者の方々には大変喜ばれていました。今年で3回目となるロシア・東欧の絵本展示も多くの関心を集めており、子どもばかりでなく大人も足を止めて美しい絵本をじっくり鑑賞している姿が印象的でした。

本行事は6研究所・センター合同一般公開の枠組の中でおこなわれました。電子科学研究所、低温科学研究所、遺伝子病制御研究所、創成研究機構（触媒科学研究所、人獣共通感染症リサーチセンター）、産学・地域協働推進機構という大きな予算とマンパワーを持つ研究所群のなかで、スラブ・ユーラシア研究センターは研究員とスタッフの創意工夫と手弁当に頼りながらも、文系センターの「星」として気を吐いていたように思います。今後とも一般公開は社会連携活動と広報の貴重な機会となるでしょう。ご来場いただいた市民の皆さまと、会場の準備と運営に尽力したセンタースタッフ・院生の皆さまに心から感謝申し上げます。［菊田］

◆　2017年度鈴川・中村基金奨励研究員決まる　◆

2017年度鈴川・中村基金奨励研究員は以下の4名の方に決定しました（滞在日程順）。［編集部］

採用決定者・所属	テーマ	予定滞在期間	ホスト教員
鈴木　佑梨 お茶の水女子大学大学院	18世紀前半におけるロシア外交官の国家勤務	2017年7月10～26日	長縄
菅井　健太 東京外国語大学大学院	ブルガリア語北東方言における補語の接語重複：言語接触と文法化の観点からの分析（ルーマニア・ブラネシュティ村の方言を中心に）	2017年8月31日～9月9日	野町
田中　沙季 早稲田大学大学院	ドストエフスキーの「プーシキン演説」における理想的な読者像としての『エヴゲーニー・オネーギン』のタチヤーナとその影響	2017年9月1～10日	越野
ダツェンコ　イーホル 名古屋大学大学院	ウクライナ語の史的アクセントについて	2017年9月18～10月1日	野町

◆　ベケバソヴァ氏の滞在　◆

2017年6月3日から2018年2月28日までの予定で、カザフスタンのアルファラビ・カザフ国立大学およびスレイメノフ東洋学研究所の共同博士課程に在籍するアセリ・ベケバソヴァ（Assel Bekebassova）さんが、国際交流基金日本研究フェローとしてセンターに滞在しています。研究テーマは、「19世紀後半から20世紀前半にかけてのカザフ及び日本における教育と近代化の比較研究」です。［宇山］

◆　ヤンチャク氏からの本の寄贈　◆

今年度の外国人研究員としてセンターに滞在されたヤロスワフ・ヤンチャク氏、および氏が所属するアダム・ミツキェヴィチ大学（ポズナン）の政治学およびジャーナリズム学部から、日本の研究者および札幌を訪問する研究者のためにということで、同学部がこれまでに公刊した中東欧および旧ソ連諸国の政治や国際関係に関わる英語・ロシア語・ポーランド語の図書約30冊の寄贈を受けました。センターではこれらを寄贈本として受け入れ、皆さま方に利用していただけるように現在手配をしています。［仙石］

ヤンチャク氏から本の寄贈を受ける仙石

◆　専任・非常勤研究員セミナー　◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。

3月13日：**宗野ふもと**「〈序論〉『手織り物からみる女性の日常生活：ウズベキスタン牧畜地域の事例から』」

コメンテータ：金子守恵（京都大学）

今回は、現在出版を目指して修正中の2015年度提出博士学位申請論文『手織り物からみる女性の日常生活：ウズベキスタン牧畜地域の事例から』の「序論」が提出されました。本論文はソ連解体以後のウズベキスタンにおける女性の生活変化を、手織り物の生産活動との関わりから論じたものです。序論では、人類学における物質文化研究、中央アジアの生存戦略研究、ジェンダー研究における本論の位置づけを試みるものでした。コメンテータからは、「マイナー・サブシステンス」論を援用する妥当性などについてコメントがありました。その後の質疑では、地域における女性のエンパワーメントに関する議論との共通点、ポストフェミニズム論への接合可能性に関する質問や、論文全体の構成についてなど、幅広い視点からの質問、コメントがありました。［宗野］

6月9日：**岩下明裕** “Borders Inside and Outside Alliances: Russia’s Eastern Frontiers During the Cold War and After”

コメンテータ：林忠行（京都女子大学）

提出されたペーパーは、*Journal of Borderland Studies* の第32巻第1号（2017年）に掲載されたもので、あわせて『歴史と地理』に掲載された「北方領土問題への墓標：2016年12月安倍・プーチン会談という歴史的転換」という時事的な内容の小稿も提出されました。ただ英語論文に関しては、新しい議論を提起したというよりはこれまでの岩下氏の議論をまとめた性質のもので、この点についてはコメンテーターの林氏も「日本語読者には新しいものではない」という指摘をしていました。その上で林氏は、北方領土に関して佐藤優氏と岩下氏を比較し、佐藤氏が「違法性」の主張を通して4島返還論の神話化をしているのに対して、岩下氏は違法性を棚上げすることで4島返還論の「脱構築」化をしているのではないかという指摘や、中露・日露・日米という「同盟」に関わる問題についての議論を提起しました。フロアからは、

岩下氏の過去の「三角形」モデルと今回の議論との関係や、ヨーロッパとアジアの「ボーダー」の性質の相違、地政的要因の作用の程度、日中露の関係のとらえ方など、幅広い議論が提起されました。［仙石］

◆　研究会活動　◆

ニュース 149 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。［大須賀］

5 月27 日　北海道中央ユーラシア研究会　**植田暁**（日本学術振興会特別研究員）「1920 年代中央アジアの食糧危機と綿花：フェルガナ地方を中心に」

6 月23 日　北海道中央ユーラシア研究会　**久岡加枝**「スターリン期グルジア（ジョージア）の音楽政策と大テロル」

6 月24 日　シンポジウム「内なる境界／外なる境界」　**日臺健雄**（和光大）「経済制裁によるボーダーの変化：ロシアの対外経済関係を中心に」；**天野尚樹**（山形大）「ボーダー・アイランドの比較史：樺太、沖縄、済州」；**上原良子**（フェリス女学院大）「国民国家の辺境から EU のゲートウェイへ：リールとマルセイユ」

6 月26 日　UBRJ セミナー　Jarosław Jańczak（センター）“Boundarization and Frontierization of the East-West Border in Europe: The Case of Kaliningrad Oblast - the Russian Exclave in the EU”

6 月30 日　第 21 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　**越野剛**（センター）「ソ連から中国へ：社会主義文化の伝播」

7 月 2 日　北海道中央ユーラシア研究会　**海野典子**（日本学術振興会特別研究員）「〈宗教〉カテゴリーとしての〈漢〉概念：20 世紀初頭の漢語を話すムスリムの視点から」

7 月 6 日　ユーラシア表象研究会　**タッチャナ・ツァゲールニック**（北大教育学院・院）「言語政策と民族アイデンティティー：ベラルーシ人から見たアイヌ語とベラルーシ語の現在状況」

7 月20 日　UBRJ セミナー　Barbara Jańczak（アダム・ミツキェヴィッチ大、ポーランド）“German-Polish Bilingualism: Bilingual Language Education and Language Policy - an Example of Słubice-Brankfurt (Oder) ‘Twin Town’”

7 月21 日　ユーラシア表象研究会　**大武由紀子**「アヴァンギャルド・デザイナーグスタフ Г. クルーツィス：社会主義リアリズムーその枠内でいかなる創作が可能であったか」；**福間加容**（大分市歴史資料館）「社会主義リアリズム絵画は紋切り型か ?」

7 月25 日　鈴川・中村基金奨励研究員セミナー　**鈴木佑梨**（お茶の水女子大・院）「18 世紀前半におけるドルゴルーキー家の人的結合関係」
Ilja Viktorov（センター）“Russia’s Political Economy: Current Tendencies, Possibilities and Risks”（センター特別講義）

7 月27 日　Mikhail Suslov（センター）“(Geo)political Aspects of the Post-Soviet Russian-Language Speculative Fiction”（センター特別講義）

7 月29 日　研究会「社会主義文化における記憶と記念の比較研究」　**高山陽子**（亜細亜大）「社会主義の記憶：中国の革命記念碑の事例を中心に」；**平松潤奈**（金沢大）「記念碑の存在論：ポスト・ソヴィエト・メモリースケープを望んで」；**半谷史郎**（愛知県立大）「1965 年 5 月 9 日の〈黙祷〉放送：ソ連における戦没者追悼行事の創造」；**加藤久子**（国学院大）「ポーランドのカトリック巡礼地が表象する darkness：碑、蝋人形、地獄めぐり」
「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」プロジェクト型共同研究報告会　**野部公一**（専修大）「ポスト・スターリン期のロシア農村における近代化と生活水準に関する研究」；**森下嘉之**（茨城大）「東欧の『境界（ボーダー）』における領域性・空間認識の比較研究：チェコスロヴァキアおよびハンガリーを事例に」；**杉本良男**（国立民族学博物館）「ユーラシア地域大国における聖地の比較研究」；**中澤敦夫**（富山大）「ロシア正教古儀式派の歴史と文化の総合的研究」

第 30 回一緒に考えましょう講座　**城下英行**（関西大）「防災学からみた原発事故」

8 月1-2 日「ユーラシア地域大国の発展モデルの比較」研究会　**佐藤隆広**（神戸大）“Effects of Trade Liberalization on Gender Wage Gap: Evidences from Panel Data of the Indian Manufacturing Sector”；**金野雄五**（みずほ総研）「ユーラシア経済連合の貿易フロー」；**田畑伸一郎**（センター）「2000 年代以降のロシア地域予算の動向：地域への補助金を中心に」；**田畑朋子**（センター）「ロシアの人口動態：近年の改善傾向と展望」；**丸川知雄**（東京大）「中国が鉄鋼超大国になった理由」；**梶谷懐**（神戸大）「中国経済の歴史制度分析序説」

8 月 2 日 Natal'ia Klobukova（モスクワ音楽院、ロシア）「日本国内の正教史跡を巡る旅（ロシア語）」（昼食懇談会）

Ilja Viktorov（センター）“Russian Financial Markets: From the Early 1990s until the 2014-15 Crisis”（センター特別セミナー）

8 月3-4 日 International Conference “Border History”　Stefan Berger（ルール大、ドイツ）“Border Studies: Some Conceptual and Theoretical Clarifications”; **佐藤公美**（甲南大）“Cultures and Languages of Revolt in the Alps of the Late Middle Ages”; Małgorzata Głowacka-Grajper（ワルシャワ大、ポーランド）“Shifting Borders and Memory Practices in the Borderlands of East-Central Europe: The Case of ‘Kresy’ (Former Polish Eastern Borderlands)”; **山本敬洋**（日本学術振興会特別研究員）“Territorial Boundaries and Marine Animal Hunting in the Kuril Islands in the Late Nineteenth Century”; Kim, Kwangmin（コロラド大、米国）“Central Asian Merchants and the Border Experience in Xinjiang, 1860-1910”; **岩下明裕**（センター）“Studying Borders in Japan and Beyond”; **藤井崇**（関西学院大）“‘New Greece’: Reformation of Borders under the Roman Empire”; Kim, Seonmin（高麗大、韓国）“Environmental Relations in the Historical Space of the Qing-Choson Borderland”; Loretta Kim（香港大、中国）“The Way We Eat: Indigenous Identity, Foodways, and Peoples of the Eastern Sino-Russian Borderland”; **岡部赳大**（東京大）“From Finnic to Soviet Fammily: Finnic Minorities and Border in the Soviet-Finnish Controversy”

人事の動き

◆　家田修教授の退職　◆

家田修氏は 1990 年 10 月広島大学助手からセンター助教授に就任、95 年に教授に昇任しました。もともとは近代ハンガリーの経済史を専門とされておられましたが、近年は東欧地域研究のあり方についての検討を進めると同時に、環境・災害復興に関する東欧と日本の比較、あるいは東欧と日本の関係の歴史など、東欧と日本との関わりについての研究も精力的におこなって来られました。9 月以降早稲田大学社会科学総合学術院にお勤めです。［仙石］

第８回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス（ソウル）に参加して

松里公孝（東京大学）

今年のスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスは、6 月 3 ～ 4 日、ソウルの中央大学で開催された。組織者は、韓国スラブ・ユーラシア学会会長のキム・セイル氏と、同学会の幹部で中央大学助教授であるキム・ヒョンスプ氏であった。私は 3 月時点で、北海道医療大学の佐藤圭史氏や日本学術振興会特別研究員の松嵜英也氏を誘って、1990 年代の非承認国家とウクライナ動乱を比較検討するパネルを提案していた。ところが、林忠行 JCREES 代表幹事や池田嘉郎日本代表が校務等でソウルに行けなくなったので、私が代理として、6 月 2 日に同じく中央大学で行われた東アジア・スラブ・ユーラシア学会サミットに出席し、コンフェレンスでも林代表幹事の挨拶を代読することになった。

開会式での筆者（向かって左）

中央大学は韓国の一流私大であるばかりでなく、文部省が私大の学生定員に厳しい枠をはめる韓国としては珍しい巨大私学で、設備の素晴らしさが印象的だった。予想されたことではあったが、昼食・夕食・バンケットすべて無料だった。ありがたいことである反面、こうした予算を確保するために組織者が時間を費やし、6 月初旬の学会に向けての Call for Proposals が 2 月に発表されるという事態になってしまったのではないかと推察する。

行ってみると ICCEES の執行委員会も平行して開かれていた。当然、ジョージ・ミンク会長をはじめ ICCEES 執行委員は大挙して東アジア・コンフェレンスにも出席した。執行委員が幕張から大阪に移動して参加した 2013 年のコンフェレンスと同じである。この 2013 年以来、ICCEES は、一昨年は（当然ながら）幕張で執行委員会・国際カウンシル（ICCEES の議会に相当）を開き、昨年は上海、今年はソウルと、アジアでばかり執行委員会を開いている。これでは欧米の委員の出費がかさむのではないかと他人事ながら心配である。来年の執行委員会は 4 年ぶりに欧米で、ブリテンで開催されるとのことである。東アジアでの運動を一緒に始めた当時の韓国スラブ学会長であったパク・スーヘオン氏が私のパネルの司会をしてくれたので昔話をしたが、開会式でミンク会長がスラブ・ユーラシア研究におけるアジアの重要

性をやたらと強調するので、「2008年のストックホルムでの国際カウンシルでは、中国学会CAREECASのICCEES加盟への懐疑論さえあったのに」と苦笑していた（『スラブ研究センターニュース』第115号参照）。ミンク会長は奥さんが日本人で大いなる親日家であることもあるが、ICCEESは依然としてアジアが可愛くて仕方ないのだろう。

組織者の一人、韓国スラブ . ユーラシア学会会長のキム・セイル氏

サミット出席者は、韓国からキム・セイル氏、キム・ヒョンスプ氏、中国から許文鴻CAREECAS書記、モンゴルからアルタイ・ドルバー国際代表、そして私であった。カザフスタン学会のスヴェトラーナ・コヴァリスカヤ会長は欠席だった。サミットの最大の議題は、翌年の東アジア・コンフェレンスの開催地を決めることである。日本はまだ幕張疲れが抜けないので、万一お鉢が回ってきそうになったらどうするかについての作戦をいろいろ林代表幹事や沼野充義前代表幹事から授かってきたのだが、サミット開始と同時に、モンゴル代表のアルタイ・ドルバーさんが来年の開催地としてウランバートルを自薦し、日中韓3国が賛成してあっさり決まった。日程も6月30日（土）～7月1日（日）に決めた。もっと驚いたことに、どこも立候補しなかったら中国（北京）がやる気満々だった。昨年上海でやったばかりなのだが、北京は上海を同じ国とはあまり思っていないようだ。モンゴルと中国の自薦の仕方を観察して、これはイベントのブランド価値が随分上がってきたものだと思った。

東アジア・コンフェレンスは、準備期間が短かった割には充実したプログラムが配られたが、キャンセルが多く、2日目は多くのパネルが統合された。初日3スロット、2日目2スロットの計5スロットしかなく、正直言って暇を持て余した。正確には数えていないが、昨年の上海よりもかなり規模縮小した印象を受けた。中国人の参加が特に少なく、しかもキャンセルが多かった。昨年の開催国としては、これは良くない態度である。THAAD配備が効いているのではないかと閉会式の挨拶でキム・セイル会長がほのめかしていた。ウランバートルでは、今回会えなかった中国の同僚とも会いたいと彼は続けた。

日本人の中からも残念ながらキャンセルが出たが、毎年20人前後の参加者をアジア各地に送り、概して水準が高いペーパーを発表し、活発に発言するので、日本人のプレゼンスは貴重である。キム会長も、閉会式挨拶の冒頭に、「日本からの参加者に感謝する。いつも活発に参加するから。これを必ず林教授に伝えてください」と言った。

コンフェレンスの規模が小さかったため、フィンランドから参加したアルカージー・モシェスという政治学者は、「ペーパー数が多かった大阪ではアジアの研究動向が知れてよかったが、これでは何もわからない」と不平を述べていた。分野間のバランスが悪く、文学・文化のパネルが多く、社会科学はそれより少なく、歴史に至っては独立したパネルはひとつもないという体たらくだった。数少ない歴史家は、文化などのパネルに散らされた。韓国人が専ら司会や討論者を引き受けて、韓国人の報告が少なかったのも残念だった。主催国として遠慮したのだろうが、韓国で開催される学会に、こちらが一番期待するのは、韓国人の研究を知ることである。

最後のスロットを使って韓国の修士院生が専ら報告するパネルが組織された。3 人の国際関係の若い専門家が、ダゲスタンのテロ、中央アジアにおける中露関係、シリア戦争と露・トルコ関係について英語・露語で報告した。シニアな研究者がこれを論評するわけだが、この修士パネルは大変面白く、今後の東アジア･コンフェレンスでも定例化すればよいと思った。反面、昨年の上海での新企画であったブックパネルは、今回はなかった。やはり、継続して参加する人数が少ないので発意が継承されない。

しかし、ひとつ特徴的だったのは、これまで日本のコアな約 20 人および中国の楊成氏を除けば、開催国であるときは一生懸命参加するが外国でやるときは行かないという態度が主流だったのに対し､閉会式が「ウランバートルでまた会いましょう」という雰囲気で盛り上がったことである。ミンク会長やアンドリー・クラフチェンコ ICCEES 副会長も、来年の執行委員会・国際カウンシルはブリテンだが、ウランバートルにも行くと言っていた。

以上が東アジア・サミットおよびコンフェレンスの概要だが、幕張以後、日本のスラブ・ユーラシア研究者の国際化熱が冷めてきたように感じられる。ひとつの原因は、International Training Program の中心になっていた青年たちが定職について忙しくなったことだろうか。ASEEES 年次大会の日本人参加者数は幕張後かえって減ったように感じるし、私が知る限りでは､幕張大会のペーパーに基づく英語論文集を日本人が編集している様子もない｡私自身は、前々会のストックホルム大会のペーパーに基づいた論文集は Roman & Littlefield から出版したが、幕張では裏方だったのでパネルにあまり出ておらず、面白いペーパーをかき集めることができなかった。幕張大会は出版財源をかなり残したのに、すでにチャンスを逸した感があるのは残念である。否、今からでも遅くはないだろうか。

昨年の上海、今年のソウルと、JCREES や諸学会がとりたてて取り組んだわけでもないのに、約 20 人の日本人研究者が自発的に海外出張するということは、東アジア・コンフェレンスが催しとしての魅力に富んでいることを示している。特に年配者にとっては、2 千人が参加し、刺激と情報に溢れているが騒々しく刺々しい ASEEES の年次大会とは違って、暖かく家庭的な東アジア・コンフェレンスの雰囲気が好ましく思えるのである。来年のウランバートルは日程もすでに決まっているので、より多くの日本人がパネルを提案すべきだろう。一度体験すれば好きになるのが東アジア・コンフェレンスである。

学　界　短　信

第 23 回国際歴史言語学会（ICHL23）に参加して

野町素己（センター）

2017 年 7 月 31 日から 8 月 4 日まで、米国サンアントニオ市にて上記の国際学会に参加した。この学会は 2 年に一度組織される大規模な研究集会で、今回も基調講演 10、ワークショップ 11、パネル 4、特別セッション 2 を含めた合計 250 以上の報告が行われ、参加者は合計 40 ヵ国ほどであった。世界のありとあらゆる言語を対象とし、またその方法論も実に多様である。古典的な印欧語比較文法から、個別言語の歴史的変化を分析する研究、歴史言語学の一般的な分析理論の研究、通時的な言語接触論や言語類型論など実に多様である。スラブ語そのものに関する報告は 7 本と控えめだが、それには今回基調講演者の一人であったヘニング・アンデルセ

ン教授（UCLA）に加え、ヤドランカ・グヴォズダノヴィッチ教授（ハイデルベルク大）、アンドリイ・ダニレンコ教授（ペイス大）、ブライアン・ジョセフ教授（オハイオ州立大）などSRCと関わってきた研究者が含まれているのは嬉しいことであった。詳細は学会のプログラムを参照されたい。

http://ichl23.utsa.edu/conference-schedule

さて、今回の国際学会では、本学協定校であるオハイオ州立大学との研究交流を促進するため、上述ジョセフ教授と私で「進化的変化と適応的変化」という特別セッションを組織した。これも上述アンデルセン教授の歴史言語学への貢献を再検討するものであり、SRC側からはSRC共同研究員の三谷教授（東京大）と私が、オハイオ州立大学側からは通時的音韻論を専攻するダニエル・コリンズ教授、サンスクリット学者のホープ・ドーソン講師およびブライアン・ジョセフ教授がそれぞれ研究報告を行った。

アラモ伝導所にて。向かって左より、ドーソン氏、筆者、言語接触研究の大家サラ・トマソン氏、およびジョセフ氏

それぞれがアンデルセン教授の言語発展理論を踏まえ、コリンズ氏は印欧祖語の共鳴音がいかにスラブ諸語に受け継がれたかという問題を論じ、ドーソン氏とジョセフ氏はアンデルセン教授の理論的貢献を分析した。三谷氏はクロアチア語諸方言の言語変化を、野町はポーランド語とカシュブ語の存在文の歴史的変化をアンデルセン教授の理論に基づいて分析した。大変厳しいアンデルセン教授の出席もあり、私にとって実に緊張する雰囲気ではあった。実際、私の結論の一つであるポーランド語の存在文におけるラテン語の一定の影響について、アンデルセン教授は同意されなかったが、アンデルセン教授からのコメントを含め比較的多くの質問を受け、今後の研究の課題が分かったことは実に有益であった。

◆　学会カレンダー　◆

2017年9月16-17日　第57回比較経済体制学会全国大会　於関西大学千里山キャンパス
http://www.jaces.info/info.html

10月5-8日　18th Annual Conference of the Central Eurasian Studies Society (CESS)
於ワシントン大学（シアトル）　http://www.centraleurasia.org/annual-conf

10月14-15日　日本ロシア文学会第67回全国大会　於上智大学　http://yaar.jpn.org

10月14-15日　2017年度ロシア史研究会年次大会　於東京大学駒場キャンパス
http://www.gakkai.ac/russian_history/

10月21-22日　2017年度ロシア・東欧学会研究大会　於一橋大学　http://www.gakkai.ac/roto/

10月27-29日　2017年度日本国際政治学会研究大会　於神戸国際会議場　http://jair.or.jp

10月28日　内陸アジア史学会2017年度大会　於大阪大学豊中キャンパス
http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/

11月9-12日　49th Annual ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention　於シカゴ　http://www.aseees.org/convention

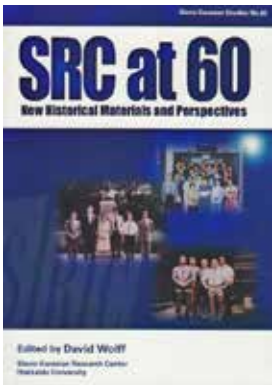
12月7-8日　スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム

2018年7月10-14日　第2回ABS（Association for Borderland Studies）世界大会　於ウィーン、ブダペスト　http://www.abs2018world.com/presentation/news/call-for-papers-borders-and-boundaries-in-asia/

［編集部］

編集室だより

◆　センター設立 60 周年記念出版物（*Slavic Eurasian Studies*, No. 32）の刊行　◆



スラブ・ユーラシア研究センターは 2015 年に設立 60 周年を迎えました。12 月 10 ～ 11 日に記念の国際シンポジウムを開催し、創成期を中心にセンターの歴史を振返りました。この度、シンポジウムの報告などを収録した *Slavic Eurasian Studies* (No. 32) が *SRC at 60: New Historical Materials and Perspectives* と題して刊行されました。その目次は、文末に示した通りです。

第 1 部には、センターのディビッド・ウルフと地田徹朗（現在は名古屋外国語大学准教授）の調査によって見出されたセンターの起源に関する資料が掲載されています。センターの国境を越える起源、ロックフェラー財団のファーズ博士やロックフェラー 3 世の札幌訪問、北大の教授の訪米など、多くの興味深い詳細な情報が得られています。こうした交流を通じて、1951 年 9 月 22 日に北大がロックフェラー財団に対して「スラヴ研究所」への支援を申請することになったのでした。

第 2 部には、国際シンポジウムで登壇されたセンターの名誉研究員である秋月孝子、長谷川毅、伊東孝之の 3 氏の報告が掲載されています。秋月氏と伊東氏は、センターがスラブ・ユーラシア地域研究の全国的な拠点となるうえで、蔵書が重要な役割を果たしたことや、1990 年に全国共同利用施設になるまでの道のりについて記しています。伊東氏と長谷川氏のエッセイは、冷戦の最後の時期、ゴルバチョフのペレストロイカの時期におけるセンターの国際化の進展をパラレルにあるいは逆説的に描いています。第 1 部が 1940 年代と 50 年代に焦点を当てたとすると、第 2 部は、60 年代から 80 年代までを回想するものとなっています。

第 3 部には、国際シンポジウムの際におこなわれた若手と中堅、外国人と日本人の研究者によるラウンドテーブルでの議論が再現されています。そこでは、近年、とくに幕張の ICCEES の後に顕在化してきたスラブ・ユーラシア研究の変化について議論されています。中国、韓国、ロシアからの我々の研究協力者は、それぞれの国における変化や日本の学界との個人あるいは組織としての結び付きについて語っています。

センター自体では、2000 年代の大きな変化として、2000 年における大学院教育の開始と 2014 年におけるスラブ研究センターからスラブ・ユーラシア研究センターへの改称がありました。大学院については、センターはこの 17 年間に博士号を 21 人、修士号を 73 人に授与することができました。こうしたセンターの大学院修了者が国内や海外の大学その他の研究機関、マスメディアや民間の会社で活躍しています。日本における大学院をめぐる状況が全般的に芳しくないこともあって、センターの大学院生の数はこのところ増えてはいませんが、卒業生の活躍によってセンターの影響は世界的に高まっていると言えるでしょう。［ウルフ、田畑］

Tabata Shinichiro　Preface

MATERIALS

David Wolff　Pages from the Past: The Rockefeller Foundation, Global Area Studies and the SRC

Chida Tetsuro　The Establishment of the SRC and the Role of the Rockefeller Foundation from Japanese Sources

PERSPECTIVES

Ito Takayuki　Nationalization, Internationalization, Functionalization: My Twenty Years at SRC

Hasegawa Tsuyoshi　Seven Years at the SRC

Akizuki Takako　Building the Slavic Collection at the SRC

ROUNDTABLE

Session 6: After ICCEES: The Future of Slavic-Eurasian Studies　Chair: Hayashi Tadayuki

Numano Mitsuyoshi, Oka Natsuko, Ikeda Yoshiro, Yaroslav Shulatov, Feng Shaolei, Ha Yong-Chool

◆ *ACTA SLAVICA IAPONICA* ◆

7 月 14 日に 39 号の投稿が締め切られました。世界 18 ヵ国の研究者から論文 13 本、書評 12 本が投稿されました。現在査読がおこなわれています。［野町］

会　議（2017 年 7 ～ 8 月）

◆ センター協議員会 ◆

2017 年度第 1 回　7 月 6 日（木）

議題

1. 教員の人事について（中央ユーラシア部門）
2. 教員の人事について（地域比較部門）
3. 2016 年度支出予算決算（案）について
4. 2017 年度支出予算配当（案）について
5. 研究生の受入（新規）について

2017 年度第 2 回　8 月 2 日（水）

議題

1. 教授人事に関する選考委員会報告（中央ユーラシア部門）について
2. 教授人事に関する選考委員会報告（地域比較部門）について

◆ センター運営委員会 ◆

2017 年度第 1 回　7 月 29 日（土）

議題

1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
2. 共同利用・共同研究公募のあり方について

［事務係］

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 149 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［仙石／大須賀］

3 月 13 日　金子守恵（京都大）（前回掲載もれ）
6 月　3 日　斉藤マサヨシ（写真家）
6 月　9 日　林忠行（京都女子大）
6 月 23 日　久岡加枝
6 月 24 日　天野尚樹（山形大）、上原良子（フェリス女学院大）、川久保文紀（中央学院大）、日臺健雄（和光大）
7 月　2 日　海野典子（日本学術振興会特別研究員）
7 月　5 日　梅村博昭
7 月 10 日　鈴木佑梨（お茶の水女子大・院）
7 月12-19 日Nyamdoljin Adiya（モンゴル科学アカデミー国際問題研究所）、Bang, Jimin（サマースクール参加学生）、Magda Bolzoni（龍谷大）、Edward Boyle（九州大）、Alexander Bukh（ヴィクトリア大ウェリントン、ニュージーランド）、Kimberly Collins（カリフォルニア州立大サンバーナーディーノ校、米国）、Guadalupe Coorea-Cabrera（テキサス大リオグランデバリー校、米国）、Bhavna Dave（ロンドン大、英国）、Radityo Dharmaputra（サマースクール参加学生）、Stanislaw Domaniewski（サマースクール参加学生）、Paul Evans（ブリティッシュ・コロンビア大、カナダ）、Ulises Granados（メキシコ自治工科大）、Sergey Golunov（九州大）、Jang, Sungmin（サマースクール参加学生）、Viktor Larin（ロシア科学アカデミー）、Lu, Nanquan（中国社会科学院東欧・ロシア・中央アジア研究所）、Shubhi Misra（サマースクール参加学生）、Park, Jong Seok（サマースクール参加学生）、Ajay Patnaik（ジャワハルラール・ネルー大、インド）、Fabiola Rama（サマースクール参加学生）、Sergey Ryazantsev（ロシア科学アカデミー社会政治研究所）、Nikita Ryazantsev、Nadzeya Shutava（サマースクール参加学生）、Sören Urbansky（ケンブリッジ大、英国）、Xu, Wenhong（中国社会科学院東欧・ロシア・中央アジア研究所）、Yang, Cheng（上海外国語大、中国）、合原織部（京都大）、石井明（東京大）、泉川泰博（中央大）、上垣彰（西南学院大）、尾崎誠（山陽学園大）、佐藤洋一郎（人間文化研究機構）、塩川伸明（東京大）、立本成文（人間文化研究機構）、中居良文（学習院大）、古川浩司（中京大）、堀江典生（富山大）、益尾知佐子（九州大）、松浦友美（人間文化研究機構）、毛里和子（早稲田大）、本村真澄（独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、山添博史（防衛研究所）
7 月 21 日　福間加容（大分市歴史資料館）
7 月 29 日　今井昭夫（東京外国語大）、加藤久子（国学院大）、窪田順平（総合地球環境学研究所）、黒木英充（東京外国語大）、向後恵里子（明星大）、城下英行（関西大）、杉本良男（国立民族学博物館）、高倉浩樹（東北大）、高山陽子（亜細亜大）、田村容子（金城学院大）、月村太郎（同志社大）、豊川浩一（明治大）、中澤敦夫（富山大）、中村唯史（京都大）、野部公一（専修大）、半谷史郎（愛知県立大）、平松潤奈（金沢大）、福田宏（成城大）、森下嘉之（茨城大）
8 月1-2 日　Natal'ia Klobukova（モスクワ音楽院、ロシア）、梶谷懐（神戸大）、金野雄五（みずほ総研）、佐藤隆広（神戸大）、丸川知雄（東京大）
8 月3-4 日　Stefan Berger（ルール大、ドイツ）、Małgorzata Głowacka-Grajper（ワルシャワ大、ポーランド）、Kim, Kwangmin（コロラド大、米国）、Loretta Kim（香港大、中国）、Kim, Seon-min（高麗大、韓国）、Lim, Jie-Hyun（西江大、韓国）、Chris Lorenz（ルール大、ドイツ）、Tessa Morris-Suzuki（オーストラリア国立大）、Zhao, Xin（吉林師範大学）、粟屋利江（東京外国語大）、岡部赳夫（東京大）、神長英輔（新潟国際情報大）、佐藤公美（甲南大）、藤井崇（関西学院大）、山本敬洋（日本学術振興会特別研究員）
8 月　7 日　村地稔三（青山学院女子短期大）
8 月　8 日　甲山治（京都大）
8 月 31 日　菅井健太（東京外国語大・院）
9 月　1 日　田中沙季（早稲田大・院）

◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は 2017 年 4 月 8 ～ 20 日の間、“59th ABS/WSSA Annual Conference” 出席及び資料収集のため、米国に出張。7 月 19 日～ 8 月 18 日の間、資料収集のため、米国に出張。

家田修研究員は 4 月 28 日～ 5 月 10 日の間、資料収集及び研究打合せのため、英国、ハンガリーに出張。

野町素己研究員は 5 月 17 ～ 24 日の間、共著書に関する事前会議への出席及び研究打合せのため、米国に出張。5 月 31 日～ 6 月 3 日の間、ICCEES のウェブサイト・広報活動に関する打合せ、韓国代表団報告会及び幹部会への出席のため、韓国に出張。6 月 7 ～ 14 日の間、資料収集、インタビュー調査及び研究打合せのため、ポーランドに出張。

越野剛研究員は 6 月 2 ～ 5 日の間、「第 8 回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会」出席、研究発表及び意見交換のため、韓国に出張。

田畑伸一郎研究員は 6 月 7 ～ 19 日の間、国際会議「ICASS Ⅸ」出席、セミナー出席及び第 2 回比較経済学世界大会出席･研究報告のため、スウェーデン、フィンランド、ロシアに出張。

岩下明裕研究員は 6 月 29 日～ 7 月 1 日の間、“2017 KAIS International Conference ‘The Territorial Disputes and Maritime Cooperation in East Asia under the Era of Uncertainty’” への出席及び研究報告のため、韓国に出張。7 月 11 ～ 20 日の間、“ABS 59th/WSSA Annual Conference” 出席・研究報告及び研究打合せのため、米国、カナダに出張。

宇山智彦研究員は 7 月 17 ～ 21 日の間、ワークショップ “Russia-China Relations in an Era of Western Retrenchment: Policy Implications and Recommendations” への出席及び研究報告のため、米国に出張。

兎内勇津流研究員は 8 月 17 ～ 29 日の間、“IFLA World Library and Information Congress” 出席及び資料収集のため、ポーランドに出張。

目　次

研究の最前線 1
2017 年度夏期国際シンポジウム《中国とロシア・北東アジアの断層線：百年にわたる競争的協力》開催される／ボーダースタディーズ・サマースクール開催される／共同研究員／ 2017 年度科学研究費プロジェクト／センター一般公開開催される／ 2017 年度鈴川・中村基金奨励研究員決まる／ベケバソヴァ氏の滞在／ヤンチャク氏からの本の寄贈／専任・非常勤研究員セミナー／研究会活動

人事の動き 9
家田修教授の退職

第 8 回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス（ソウル）に参加して by 松里公孝 10

学界短信 12

第 23 回国際歴史言語学会（ICHL23）に参加して by野町素己 12
学会カレンダー

編集室だより 14
センター設立 60 周年記念出版物（*Slavic Eurasian Studies*, No. 32）の刊行／*Acta Slavica Iaponica*

会議 15
センター協議員会／センター運営委員会

みせらねあ 16
人物往来／研究員消息

2017 年 9 月 1 日発行

編集責任　大須賀みか
編集協力　宇山智彦
発行者　仙石　学
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/